

# 第4回男女別学教育シンポジウム

2015年5月23日（土）聖光学院中学校高等学校にて

## パネルディスカッション

コーディネーター 實吉幹夫(東京女子学園中学校高等学校校長)

實吉：こんにちは。コーディネーターとして役をお受けしたので皆様にとって十分な事ができるかどうか自信がありませんがお付き合いいただきたい。今日壇上にお並びいただいた先生を紹介させていただきます。

阿部義広先生（浅野中学校高等学校校長）

錦 昭江先生（鎌倉女学院中学校高等学校校長）

滝口佳津江先生（田園調布雙葉中学校高等学校校長）

工藤誠一先生（聖光学院中学校高等学校校長）

吉野 明先生（鷗友学園女子中学高等学校校長）

## パネルディスカッション①

阿部義広先生（浅野中学校高等学校校長）のお話

實吉：今、基調講演として工藤先生、吉野先生から、まあ工藤先生は聖光学園、吉野先生は鷗友学園で実践している事の裏付けがどこにあるかが中心だったかなと思う。これからお話をいただく先生はお三方いらっしゃいます。両先生のお話を受けて阿部先生には男子校として、錦先生には女子校としての話、滝口先生には、ご存じの通り中学校高校での募集をしておらず、小学校の募集で小学校から高校まで12年間で、そういう教育の中で皇太子妃殿下が生まれたのかなと思うが、そのあたりの話を伺いたい。阿部先生よろしくお願いします。

阿部：皆様こんにちは、浅野中学高等学校の阿部です。今年度のかなり早い時期に工藤先生を通じて今回のパネラーのお誘いをいただきまして、すぐにお受けしたのですが、あとから冷静に考えますと、私は自分自身が私立の中学高校男子校に6年間それから教員として男子校で43年と、50年ほど男子校だけで生きてきたものですから、男女別学についてしっかりしたお話ができるのかなという不安もあり、後悔、反省しつつ今日ここに出てきています。しかも工藤先生の講演を聞きましたら、なんと私が準備してきたことを全て工藤先生がお話しになられて、エピソードまで同じすから私の話は工藤先生と重なるところが多いかと思いますがご容赦ください。のっけから重

なりますが、男子校だけで生きてきたということで、女子校について知る機会は、先生方とのお付き合いで知らされる情報と、女子校出身の娘と家内の話を聞くぐらいしかないわけです。しかもこれも工藤先生と全く同じで、我が家には猫が4匹いて3匹が雌で1匹が雄です。この1匹を、男は私と彼だけですから、私はエサをこっそりあげたりして非常にかわいがっていたんです。ところがある日帰ったらその猫が元気がない。どうしたんだ、と聞いたら、去勢されてしまっていた。つまり雌が3匹オカマが1匹の女ばかりになってしまった。そういう家庭で暮らしているから学校に行くと男の子を見るとホッとします。本校に入ってきた中学1年の生徒は、私と同じように女子から解放されたと本当に喜んでいる。吉野先生の女子校のお話とは全く逆です。女の子はおしゃべりでうるさくてイヤだ。あるいは上から目線で頭を抑えられてイヤだ。中学1年生のほぼ全員が男子校に入れて良かったと言っている。ところが6年間の頃の中頃、中学3年、高校1年くらいになると女子が恋しくなる。たとえばクラブの試合に行きますと共学校は女の子が黄色い声で声援を送りますし、あるいは汗をかいてベンチに下がった時には女子のマネージャーがタオルを差し出してくれる。それを見てうちの生徒達はいいなあと羨ましがり、私のところに生徒が10数名で男女共学にしてもらえないかとやってきます。私が「まかりならん。本校は95年男子校としてやってきた。男子校としてのノウハウを持っているのであって女子を入れるつもりはない」と言うと少し寂しそうな顔をしていますね。

工藤先生と同じ話ばかりではいけないのでちょっと申し上げると、創立95年になる本校の創立者浅野總一郎はいろいろな企業を興して失敗を繰り返しましたが、その失敗にめげずに不屈の精神で物事に立ち向かっていきました。この創立者の生き方が本校の校訓になっておりまして、「九転十起」と呼んでいます。ですから本校に入学してくる生徒にはやはり男の子としての逞しさ、強さを求めます。男の子は逞しく育てたい、世の中に出てしっかりと自分の考えを持ってやっていける人物を育てたい、これはどこの男子校も同じだと思います。学校の名前をあげますと、サレジオ学院さんは「25歳の男作り」というこういう言葉で学校の方針を掲げていますし、また鎌倉学園さんは「文武両道」、本校と同じで、運動や学校行事等、いろいろな事を体験させながら強い男の子を育てていきたいという方針。ですから、男子校は逞しい男の子を育てたいというのはこれはもう当然なんです。しかし、現実はどうかといいますと、中学1年生をお預かりしたときに生徒は人それぞれです。つまり運動の得意な子もいれば苦手な子もいる、友達作りのうまい活発な子もいれば、物静かな子もいる。つまり男子校だからといって全員に益荒男ぶりを強要してさあ育てていこうという時代ではありません。その一人一人に即して、子供達の問題を見つめつつ、そして6年後にしっかりと考えの持てる男を育てたい。ですから現実には最初から男の子が逞しいわけではありません。ひ弱な子もいっぱいいます。ですから強く鍛えるために、ある種の負荷を生徒達にかけます。つまり両肩の上にある種のおもりを載せるんです。それは勉強の課題の場合もありますし、あるいはクラブでの練習の場合もあります。その他いろいろな事を考えさせるという面で男の子に負荷をかけ、そしてその

負荷や困難を自分で乗り越えさせる。これが我が校の一つの方針です。教える我々の立場からしますと、先ほど言いましたとおり、私は男子校でしか育ってきていませんから、中井先生やおおたとしまさんの本の言葉をお借りして男子校の良さを言えば、男の子だけでのびのびとでき、深い交流で人間関係が築かれる、共通の価値観で学業に専念しやすい環境を作れる、ということに尽きると思いますが、本校は男の子であることに期待して相応の負荷を与えて6年間を過ごさせる、これも男子校の必要な条件であると申し上げてかまわないと思う。また、教える側から言いますと、男の子だけですから多少の言葉の荒さ雑さというのは許されるのではないか。実はこのことで私は養護の教諭にたしなめられました。お前は SMAP 系の人間だ。お前は吉本系の人間だと言ったら、先生それ差別ですよ、そんなこと言っちゃいけませんよと。ところが男の子はそういうところは明るく受け入れてくれる。ですから本校には SMAP 系の男の子もいっぱいいますし、吉本系の男の子もいっぱいいます。強い子もいれば弱い子もいる、そうしたいろいろな生徒達を6年間でなんとか逞しく育てていきたいというのが私の申し上げたい事です。

最後に私の感想を、お叱りをうけるかもしれませんが一言だけ言わせてください。本校は男子校でありますけどだんだん共学校化しております。どういうことかお分かりでしょうか。つまり男子校なんですけど母子共学校になりつつある。全員じゃないですよ。たくさんお母様がいらっしゃいますから全部とは言いませんけれども、昔に比べて、お母さんがなかなか子離れできずに我が子と一緒に入学してしまう方が多くなったように思えます。

實吉：ありがとうございました。新しい言葉がでましたね。母子共学校。これは今日のお持ち帰りの言葉かもしれません。それでは続きまして錦先生からお話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

## パネルディスカッション②

錦 昭江先生（鎌倉女学院中学校高等学校校長）のお話

錦：錦と申します。私の勤務する鎌倉女学院中学校高等学校は、鶴岡八幡宮から若宮大路を海に向かい一の鳥居のすぐ隣にあります。創立明治 37 年で、当時、東京の開成中学の校長であった田邊新之助先生が、「女子にも不偏中正の立場で開成と同じように日進（最新）の知識を授けたい」という抱負をもち、本学院を現在の地に開学しました。女学院という校名から、よくキリスト教系の学校と思われるのですが、宗教色のない学校であります。

今、それぞれの先生方が男子校出身とお聞きしましたが、じつは私は幼稚園から大学までずっと男女共学でした。中高は公立出身です。社会科の教員ですが、30 数年前の当時は、就職難で社会科の教員採用がなかなか無く、やっと今の学校に就職でき

たわけで、よく考えもせず採用の日を迎えました。新人紹介の時、講堂で初めて壇上からズラッと数百人のセーラ服が並んだのを見たその段階で、ちょっと間違えたところに就職したかなと思いました。よく、今保護者の方から女子校って特殊ですよ。やっていますか？という不安を伺いますが、その気持ちは本当によくわかります。しかし、当時、勤務校は現在のような進学校ではなく、お嬢様学校で生徒の気立てが良く、一生懸命まじめに勉強する子が多かったです。夏休みの終わりに、公立中学校時代の社会科の恩師を訪問しました。その際に、夏休みに生徒に書かせた社会科のレポートを持参しました。そのレポートをご覧になった先生は、「本当にあなたがうらやましい、公立の中学校ではこうした宿題を一斉に出すことはできない。もちろん経済的な背景などはあるが、やはり男女共学だとなかなか男子はこれだけの丁寧なレポートをすべての生徒が書くというのは難しい」とおっしゃいました。この評価をうかがい、初めて自分は恵まれている学校に就職できたのだなと思った次第です。それ以来、本当に生徒に助けられてここまで長くつとめることができました。

一つ女子の特性として、私は大人になってからは男女の能力にそれほど差は無いと思っていますが、発達段階ではやはり男女の差異があるかと思っています。女子の良い点というのは、コツコツまじめに堅実にということ、繰り返しやる作業、丁寧にやる作業、これは非常に女子が向いていると思います。先ほど吉野先生から英語教育を熱心に取り組まれているお話がありましたが、本校でも1980年代からコミュニティヴな英語教育を念頭に指導しております。最初の段階は、やはり繰り返し繰り返しが大切です。毎日学校で学んだ事を、家庭で何回も何回も体で覚えて繰り返すという宿題ができるかどうかということが大事です。毎日やったことを復習するという、その繰り返しの間に女子はできる子が多いです。もちろん差異はあります。全然できない子もいます。しかし、ほとんどの子ができるから、ああ、「自分もやればできるのだ」と思える。そういう効果は大きいと思います。このように、女子校では女子の特性にあった指導ができる、という利点があると思います。

なお、生徒も教員も、一度、女子校の世界に入ると、あまり、女子校であるということを感じ意識しなくなります。ですから、あまり男子校だから、女子校だからと過度に心配されることは無いと思います。本校の卒業生の多くは、男女共学の学校に進学していますが、進学や就職して臆してしまうことは全くないと言っています。そして、女子校では、女子だからこれできない、男子はこれができるという意識がほとんどない、ジェンダー的にフリーになるわけです。だからなんでも挑戦する、みんな何でも一生懸命。先ほど、吉野先生から体育祭が学年別ということでしたが、私も就職した時、体育祭の学年対抗にはとてもびっくりしたのですが、それぞれ学年毎にすごく盛り上がります。初めて体育祭をごらんになった中1の保護者も生徒もとてもびっくりする。それはなぜかというと、高3から中1まで皆一生懸命なのです。しらけてる人がいない。皆が全部いろいろな役割を果たしている。大きな道具を運んだり、力仕事もやって実行委員長でも何でも全部女子がやる。そして、最後に、伝統的なカドリールという踊りを、高3の生徒は泣きながら踊る、後輩は高3の健闘にエ

ールを送る。この女子校の一体感に観覧席の保護者の方々は感動するわけです。

さらに、そして生徒達は自分の将来、女子だから就職に不利できないという事は全然考えていません。努力すれば絶対夢はかなう、そう信じている子がとても多いです。そういう、まぶしいきらきら輝く笑顔を持って皆巣立っていく。それが女子校の良さだだと思います。現在、卒業の5年後進路調査をしています。本当に多くの生徒が大学院に進学したり留学したり、皆堅実な、あるいは堅実な進路を獲得しているように思います。そういう意味で、女子のパワーが存分に発揮できて、将来にわたって自己肯定感が持てる事が女子校の最大の利点ではないかなと思います。

最後にもう一つ、男女共学だからといって、私も経験がありますが、別に男女が仲が良い訳ではないですよね。やはり男女共学でも男子グループ・女子グループになります。そうすると、共学校は、女子グループだけの友人選択肢は狭いわけです。しかも公立は三年、三年と分断されている。今、大学時代の友人をみますと、女子校出身の友人は、中高時代の友達の絆が深くとても羨ましいと思います。生涯にわたってつきあえる友達というのはやはり同性かなと思います。本校は1学年160人います。とても活発な生徒もいれば、図書室好きな静かな生徒もいる。様々です。でも、鷗友学園と同様に、頻繁に席替えをしたり、毎年クラス変えをしたりする中で、1学年160人全部が友達になっていく。さらにその中で本当の心の友、親友を探しだせる。そういうところが女子校の利点だと思います。まだまだ語り足りないですが、そういうことで、就職以来30数年を経て、今は、私は私立の女子校に就職できて本当に誇りに思っています。

實吉：将来に向かって肯定感を持てる生徒が多いというのは大事な要素だと思います。では、滝口先生をお願いします。

## パネルディスカッション③

滝口佳津江先生（田園調布雙葉中学校高等学校校長）のお話

滝口：田園調布雙葉中学校高等学校校長をしております滝口と申します。錦先生も学校の紹介をされましたので、簡単に紹介させていただきます。

田園調布雙葉の特徴と致しましては、幼稚園で60名、小学校で60名の募集をさせていただき、その後中学高校の募集を致しておりません。ですから長い生徒は14年間、小学校からの生徒が12年間、一つの学校（女子校）で過ごします。私自身も小学校からこの学校にお世話になりました卒業生です。横浜雙葉学園の開校をスタートに、次に静岡雙葉学園、その次に東京四谷の雙葉学園、その次が福岡雙葉学園そして最後にできたのが、本校田園調布雙葉学園。5つの姉妹校をもつ、校訓「徳においては純真に 義務においては堅実に」を共通に掲げるカトリックミッションスクールで

ございます。

今日は錦先生と吉野先生が女子校のことを充分にお話し下さり、阿部先生と同様、全部かぶってしまうような感じもありますが、吉野先生の理路整然とした分析に添えて、こちらは肌感覚のような形で女子校の事をお話しさせていただきましたらと思います。

昨今「女子会」といって女子だけで集まってお食事をしたり、わいわい楽しんだりする時間をもつことがあると思います。あれはいったい何なのでしょう。なぜわざわざ男性を入れないで、女子だけで集まるのでしょうか。私も何度か経験しましたが、やはり女性だけの安心感といいますか、気取らず、気を遣わず、背伸びしないで「素」の自分を出せることだったり、お互いの共感性を率直に分ちあったり出来るところが魅力なのだと感じます。女子校の生徒達もっている、安心感のようなものがあるのだと思います。そして、女子校の魅力も同じようなところに感じます。特に思春期は、男女ともそうだと思いますが、身体の変化も大きい時ですし、できれば異性の前では恥をかきたくないという気持ちがあると思います。でも、それが同性の前であれば、女の子同士なのだからと、恥ずかしくないわけです。ただでさえ他者の目を気にして自分を表現しにくい年頃の時に、ありのままの本当の自分を伸び伸びと表現できること。男女別学にはそういう良さがあるのと私は思います。

特にアイデンティティーの確立を成し遂げる年代にあって、何よりも **being** (どう生きるか・どうあるか) を自分自身の中に確立することが大切だと思います。 **Doing** (何をするか) はもう少しあとでも良いと思います、自分が人生で何をやっていくのか、それよりも、まずしっかり自分がどのように生きていくのか、何を大切に生きるのか **being** にあたる自己確立のその時に、色々な目が気になって自分がうまく表現できなかったり、伸び伸びできなかったりすることは残念なことです。別学の良さとしてが、妙な目を気にしないで伸び伸びと自分を表現できることがあげられると思います。

本校の場合、女子ばかりですので、何でも自分達でいたします。小学校の頃からある意味やんちゃな育ち方をしているかもしれません。男の子の目もありませんし、何事も自分達でやらなければ成り立ちませんので、案外たくましいです。私自身も田園調布雙葉を卒業し、4年間だけ大学に参りましたが、(え?こんなこと自分たち女子にもできるのに) と思った事も多々ありました。男子学生が気を遣って、ぱっと手をだしてくださることも、女子校では自分達でやるのが当たり前。会長でもリーダーでも立候補したりすることや、少々重いものを運んだりすることを男子に譲る必要はあるのかと、そのように思ったこともありました。伸び伸びとしたリーダーシップなどが育てられるのは、恐らく女子校で遠慮がないからこそ育っていく良さではないかと思っています。

そして、先ほどからも紹介されている書物にもあるように、女子は穏やかさや、静けさ、落ち着きを好むような傾向もございます。昨日、試験の最終日でしたので本校は学校に劇団をお招きして観劇会をいたしました。その劇団をお招きする前段階に、県立中学校が何校か集まって行われたその劇の視聴にお伺いしたことがありました。

せっかく劇を見るその直前、確かにその大会場は騒がしかったです。男女共、わいわいしている会場で突然、先生が「静かにしろ！」と怒鳴られました。命令口調で罵声がとぶような状況。これは女子校にはありえないと思いました。そのような大きな声と激しい言葉で怒鳴られるような状況は、大声を嫌う傾向にある女子にとって、それだけで萎縮するような状況となります。女子には大きな声で「整列！行進！はじめ！」といった指示はそぐわず、そういう空気の中で育っていく女子と、誰とも言わずに会場が静まり、「静かに！」などという声が飛ばなくてもスーッと雰囲気作りができる、そういう雰囲気のある環境で育つのでは随分違うと感じました。

そして、先ほど女子の読解力についてお話がございました。もちろん男子の中にも言葉の表現豊かな方や、現にたくさん作家の方もおられますが、女子の言葉による表現力は大変豊かなものがあると思います。本校には18歳を筆頭に幼稚園児までおりますので、18歳のお姉さん達が表現する豊かな表現力に触れて育ちます。本校では、卒業間近の高校3年生が小学校5・6年生の教室に出向いて、自分達のことばで「建学の精神」や本校の目指している教育理念を語る機会を設けます。「中学に進学したらこうなる。本校の伝統を大切に守って欲しい」等々、少人数のグループごとにやわらかい自分たちのことばで伝える交流の機会です。こういう機会を通してでも、言葉に育てられて、豊かに表現力というものも育ちやすいと思います。これからは発信力、ただ聞いて受け止めるだけではなくて問題解決能力を高めていく教育が推進される時代です。その中で自分を表現していく、そこを臆せず、しかも深いところまで表現していく女子の雰囲気というものが、人格を高めるbeingを深く育てていく上で大きな力になるのではないかと考えております。

先ほど工藤先生が、被災地支援のお話しをされました。女子は泥掬いとか力仕事こそできませんが、関東地区という東北に近い良さをいかして、宿泊で2泊3日ずつ、岩手県釜石市のカリタス釜石にて、夏と冬に訪問活動をさせていただいております。女子校ですので手作りのクッキーを焼いて一つ一つ手書きのカードをつけてお届けしたり、縫い物をカードと共にお届けしたり。手前味噌ですが言葉一つ一つの表現が、共感力があって、丁寧で嬉しいと喜ばれることが、ありがたいことに多いです。女子の丁寧さが良さとして引き出され、誠実に心を込める良さが生かされ、お茶っこサロンや仮設住宅を訪問させていただきお届けしたり致します。面白いこともありました。たまたまカトリックの男子の活動とご一緒になった時のことです。そちらの男子校はテントを張って、炊き出しとしてカニ汁を一生懸命作っておられました。野菜切りなどなかなか大変そうで、ここは女子力の発揮しどころと、私どもは野菜切りでそちらのお手伝いをし、こちらが歌を歌うときには男子高生達が靴整理の下足番の形で手伝って下さり活動いたしました。こちらが高3生の春休みでしたし、男子校の方々は高2になられる春でしたので、お姉さん達の方がパワフルで、言葉も巧み。大人しい男子の皆さんに女子の方が勝ってしまった感がありましたが、でも私共はわかっております。もう暫くしたらこの坊ちゃん達が、ぐんぐん成長して力をつけ、女子には足下にも及ばないたくましい姿に成長されることを。それぞれが、それぞれの成長の過程

で、それぞれの良さをもって、それぞれに準備活動をし、その上で一緒に、という共同作業はとても発見の多い、よい活動でした。この例のように、それぞれの特性を生かしたところをじっくり伸ばして、やがてそれぞれの良さをしっかりと確立した上で、一緒にというありがたはとても良いことではないかと思えます。

そろそろ終盤に入ります。女子の特性といたしまして、例えば本校では、こういう会場に華道部が舞台を飾る大きな生け花を用意致します。一つ一つのお花に意味をこめて活けます。保護者会などで、この花の葉っぱには保護者の皆様への尊敬の気持ちを、マーガレットには本校の校訓である「純真」の意味をこめ、かわいらしいバラの花には女子のきらきらした活力を・・・などご説明し、保護者の皆様をおもてなしをするのもひとつの女子校の文化です。また、本校は文化祭で高校3年生全員参加のレストランを開きます。高3生徒達は長いこと歩みを重ねてきたお互いの良さも弱さも十分に分かっています。特に幼稚園小学校から「学力」という一種のふるいにかかっている生徒達ですので美術が得意な人、音楽が得意な人、数学が得意な人・・・、その子達のそれぞれの特性をいかした深い人間関係の中で、心を込めた手作りの「食」を提供しながら感謝のおもてなしを伝えていくのです。そういった細やかさや豊かさはやはり女子校ならではの取り組みかと思えます。そういった活動を伸び伸びと実践しながら、同じように自分の **being** の部分をしっかりと育てて違った個性を持った異性と出会う、こういう流れをつくる男女別学はとても魅力的な学校ではないかと私は考えております。

たくさんのお時間を頂戴致しました。ありがとうございました。

## パネルディスカッション④ (全体で)

實吉：ありがとうございました。普段接している滝口先生の面目躍如といったお話でした。工藤先生の話の中に生きているから生きていくに変えていくというお話がありましたが、そういう意味では田園調布雙葉ではまさに **being** というまさにこれからの時代を生きるのに必要な力である、というお話をいただいたのかなと思います。工藤先生、吉野先生には発表していただきましたが、両先生のお話うけて、あるいはこのお3方の先生の新しい話を受けて、もうちょっと話をしていこうかなと思いますが、先程は工藤先生が先でしたので吉野先生先にいきましょうか。

吉野：今、皆様のお話を伺って、そうだよねと本当に共感するところが数多くありました。一つ一つの学校はそれぞれ伝統があり、違いがありますが、やはり女子校は女子校としての男子校は男子校としての特徴が重なっている部分があるのだなと思えました。

運動会の話がでてきましたが、男子校は割と縦割りの運動会が多いですね。その



中で上級生が下級生をしっかり指導して、縦割りの中で競い合い、伝統を受け継いでいきます。私ども教員の中にも男子校出身者がいまして、あれはいいぞ、うちでもやろうよ、と言うのです。私もこれはこれで非常にいいなと思っていますが、やはり女子校には女子校の横割の、学年対抗の良さがあるのです。さっきも少しお話したようにしっかりと横の関係性ができて安心してこの場にいられる、勉強も落ち着いてできる、だからこそ私は力を発揮できるという状態のなかで、一緒に同じ学年の仲間と一緒に頑張ることができるのです。中3にとって、中1は全然相手にならないわけですが、でも中1は上級生の姿を見て憧れながら、あるいは高校3年生の姿を見て憧れながら、いつか私もあんならんだと、ロールモデルを目の前にして一生懸命頑張り、その結果学校全体として一つの方向に動いていけるのです。そこら辺が、男子校と女子校の運動会というところを通して見た違いかなと思いました。

實吉：ありがとうございました。今のは体育祭だけじゃなくて、音楽コンクールなんていうのはまさにそうなんじゃないですかね。1年生の段階の発表は未熟だったかもしれないけど上級生の発表している姿、上級生の団結力を見て、いずれ私もあそこにとこのような、目標を作る意味もあるのかな。こう言う話は他の学校の女子校の先生からも聞きました。それでは工藤先生お願いしますが、先程のお話の中で洗足学園とのコラボというお話がありました。何年生でしょうか

工藤：学年的には中学1年生から高校2年生くらいの二人以上です。

實吉：なるほど。

工藤：で、そのやるものによって変わりますが、今度夏休みにハーバードの学生と一緒にやるというのは高1高2の生徒です。またヤングアメリカンズというミュージカルに関しては中1から高1くらいまででやっています。

實吉：それでは先生お願いします。

工藤：そうですね。私は運動会の話聞いて、私の娘は女子小中高で今年一番下の娘がもう高3なんですね、最後に毎年卒業する頃になるんですが、やはり横でもって運動会をやる。私は男子校育ちですからまったく理解できなかったのですが、それがやっぱり女子校としての一つの特徴だし、それに私の娘達はいつも満足していたんですね。考えてみると3人娘が全部運動会のこと満足していた。たまに高3に対して高2が勝っちゃうこともあるみたいですが、やはりそれぞれその中での、これは女子としての特徴なのかなと改めて感じました。かたや男子校はどうしても縦のつながりがあって先輩後輩、ですから私なんかだって聖光学院の出身ですから未だに、校長であり理事長でありますけれど、私より前の、1期生から10期生の先輩のところにいっ

たら、おい工藤！つげー！というこの世界でずーっと未だに、すべて縦の関係がいつまでも変わらないそういうような部類になりますが、それは一つの特徴として延々と続いていくんだなということを思いました。いずれにしても大したことないというのは、何を選択し、その中で何を選ぶことができるか、できるということがやはり素晴らしいことだと思う。ですからそうした情報発信というのを我々は男子校、女子校としてこれからも続けていくことが大切だと思う。ある県では全く女子校がなくなってしまう。愛媛県では愛光さん共学になりましたし、聖カタリナというのがありました。これも共学になりました。ということはまったく女子校がなくなってしまう。そうした中で、やはり子供達の選択肢という意味で、男子校女子校というものがこれからも生き生きとしていることが、これからの次代の子供達を担っていく上で必須の事であるという事を改めて、今日先生方の話を聞いて痛感した次第であります。

實吉：ありがとうございました。実は中井先生のお話が今日のご挨拶だけになっているので、今日の先生方のお話を受けてちょっとお聞きしたいと思うのですが。中井先生はできれば、高校よりも中学、むしろ中学よりも小学校かなということで、男女別学にする時期の事でお話があるかと思うので、先生方のお話をうけてちょっと補足していただきたい。

中井：そう言われるのは、私が以前勤めていた学校が小学校から男女別学教育を行っていたからですが、ただそれにこだわっているわけではありません。やはり、男女それぞれ特性があって、それは生まれつきのものがあります。脳の違いから感じ方とか興味関心とかいろんな違いがありますけれど、その特性に応じて教育をした場合に男子校の場合は男子をより伸ばす事ができるし、女子校の場合は女子がより安心して自己肯定感を高められ、より伸ばす事ができるということを、先生方の具体的な話を通じて私もまた実感している次第です。ありがとうございます。

實吉：ありがとうございました。阿部先生、先程お話いただいて、また色々なお話伺っていくと、もう少し話しをさせろよという部分があると思いますので、2、3分どうぞ。

阿部：学校のPRというのはあまり話の中に入れられなかったのですが、これは工藤先生と重なってしまうことで遠慮したのもあるんですが、一応東日本大震災のボランティア活動に関しては、初年度は行きませんでした。2年目からもう3年続いています。毎年春休みに、部活の生徒の有志がバス2台ですから6、70名が行って向こうで清掃などをいろいろやっています。それから先程生徒に色々な負荷、重さを課すという話をしましたが、これも最近ですが、学校のカリキュラムとは別にカリキュラムの外側でやはり実用的な英語教育ということを始めました。中学3年、高校1年を対象として、アメリカの大学生に来てもらい、5日間英語だけの交流の機会を与える。

さらにその上の段階で、希望者だけですがアメリカのスタンフォード大学が作ったプログラムに参加させる研修も2年目になります。観光旅行で海外に行かせるというのは全くやりたくありませんでしたし、あるいはアメリカの有名な大学の場所だけ借りてどこかの語学学校が英語を教えという、そういう企画もあるんですが、これもやめようと。ということでスタンフォード大学の先生そして学生達が協力してくれて企画立案から発表までを生徒達に英語でのコミュニケーションをしながら指導してくれる、そういう機会を10日間ですけれども生徒諸君に提供したいと思ったのです。ちょっと宣伝でした。

實吉：今日は保護者の方がおいでなので学校の宣伝をさせていただきたいということで、よろしくお願いします。錦先生の学校は明治37年ということですからちょうど日露戦争の最中に学校を開校したことと思いますが、もう少し先生の方でお話したいことがあれば。

錦：先程話を伺って一つ女子校と違うなと思ったのは、男子校だと高校生くらいから女子校との交流を求めるとい話がありましたが、女子校はあまり関心がないということですね。これまでも、男子校から生徒会同士で交流しませんかというような事を要請されたことはあります。学校が禁止しているわけではないのですが、あまり生徒会も動かなかったですね。先日、本校が茶道の会場となり、茶道部のある学校がいくつか来校されたのですね。男子校の生徒さんも来ていたのですが、関心をもつのは最初だけで、すぐに普通の男の子だね、と言っていました。男女に関する関心度というのは随分違うのだなと思いました。

阿部：今の錦先生の話で、うちの生徒が先生の学校の文化祭に行ったんですよ。で帰ってきて喜んで話をしてるんですよ。やっぱりそこら辺が男女の違いなんでしょう。でも聞きましたところ、招待状がなければ入れない、女子のある種の危機管理だと思うんですけど。

錦：チケット制になっております。ただ受験生はチケットがなくても入場できることになっています。

吉野：いわゆる興味関心という意味では、女子校の場合には確かに男子高生と比べると少ないかなと思います。本当に男の子に興味がある子は、中学3年生で共学を受験して出て行ったというケースも以前にはありましたが、最近はないですね。ただ女子だけで色々な話し合いをしていると、もっと違う意見があるのではないかと、男の子の意見も聞いてみたい、という考えは最近でてきています。

例えば私どもの場合には、韓国の高校が韓国、日本、中国、シンガポール、タイなどの高校生を集めて開催する国際シンポジウムに、灘高校、早稲田高等学院、海陽学園などの男子校と一緒に参加しています。例えば環境問題とかを英語で話し合うのですが、そこで男子の意見に触発されて、もっと男の子と討論をしてみたいと海陽学園と1年に1回ずつ行き来してディスカッションをするKOP（海陽—鷗友プロジェクト）を生徒同士で作ってしまいました。女子校に許可もなくそんなことを持ちかけてしまって申し訳ないと、海陽学園の先生にわざわざいらしていただいたこともあったのですが、単なる男子への関心だけではなく、多様性というか、自分達が持っているものを持っている異質な相手を求めて、いろいろな事と幅広く付き合ってみたいという気持ちはあるようです。

ちょっと元の話に戻りますが、東日本大震災のボランティアについてです。本校では、毎年40～45人がバス1台で「東北学習旅行」を行っています。生徒一人一人が、今ここにいる場で何ができるかといふことを考えるために、そこで経験したことを持って帰って全校生徒にシェアする会を開いています。また、現地の方を招いて講演会をしたり討論会をしたり、あるいは物産展をやったり、そんな形で震災の事を忘れないように、そして一人一人が今自分達がいる東京で何ができるのか考える、そんな共感性を持った催しを毎年しています。

實吉：ありがとうございました。滝口先生は夏に中堅現職研修のお世話をされていて、先生方が集まるとやはり女子会ができていますよね。その辺の話をもうちょっと大人になってからのという事での話、中高時代と大人になってからの女性のということとつながりが、もし話があれば聞きたい。それから阿部先生の方から負荷のかけ方なんて話がありましたので、滝口先生の学校で女の子にそういう事があるかな、というのはちょっとあります。

滝口：まず最初のご質問ですけれども、先程、錦先生もお話しされたと思いますが、もちろん夫婦としてのパートナーは別かもしれませんが、一生の友達も同性の友達だと思います。本校は特に長いこと一緒ですので、卒業生のご主人にあたる方から「家内が友達とのこんなに深い関わりを持っているのが羨ましい」と言われるくらい深い絆を持っているのはたしかです。小学校時代の同級生と卒業後40年もたつ中で、数多く集まったり、その深い絆というのは女子校では皆がその対象になる可能性があります。学年皆が名前も足の形も爪の形も覚えているような深い絆というのは一生ものとしてできあがっていると思います。また、負荷という言葉のイメージが中々できないですけれども、ある意味、共学ではなくて別学というのは『井の中の蛙』と言われるようなイメージがあるかもしれませんが、私は「井の中の蛙大海を知らず されど天の高さを知る」という言葉がすごく好きです。確かに男女別学であれば、一番気持ちが揺れ動く思春期の時代は『井の中の蛙』かもしれないですが、それだからこそ見え

てくるそれぞれの性別の個性もあります。本校も錦先生のところと同じで、共学化して欲しいという声を聞いた事がないので、当たり前のように女子校を楽しんでしまっていますが、ある意味塀を作っているような部分が負荷といえれば負荷なのかもしれません。でも、それが見えないからこそ「天の高さ」の部分、例えばそれぞれの性の持っている豊かさであったり、見えないからこそできた深い絆であったり、余計な目を気にしないからこそ苦手な力であったり、ミッションスクールの場合はそれが深いミッション性と申しませうか。他が見えなかった分、深く培われる部分が生まれてくるかと思えます。その壁のようなものが、逆にすごく人間性の深さや尊さを作っていく力になっているのではないかと思えます。ちょっと抽象的な表現ですが、そのように感じています。

實吉：吉野先生も女子校という意味で感じている部分があると思えますが。

吉野：はい。周りを囲んでいる塀と、もう一つは蓋みたいなのがある気がします。

一般的にいいますと男子校の方がいろいろな意味で自由さがあるのでしょうか。さっき錦先生のお話にありましたように、やはり女子校ですと色々な意味でちょっとこれはまずいのではないかなとって制約してしまうことがどうしてもあります。学園祭などでも、お客様をもてなすのだったらもう少しこうした方がいいのではないのとか、やはり男子校の生徒がぞろっと入ってきて、あちこちでべたべたされてもまずいとか、例えばそういうようなことが女子校はどうしてもあります。

また、こういう規則でやりませうという、自分たちで決めて代々受け継いできた決まり事があります。これは、基本的に越えてはいけない塀のようなものかもしれません。と共に、学校としては、そこにこういう枠の中でやってもらいますよという話蓋をします。それは不自由だと生徒が受けとめ、その蓋を外してもっとやりたいという場合には、これまでの経緯を調べ、他校の生徒から情報を集め、こういう論理でこういう風に攻めていけば大人もうんと言わんじやないか、蓋が外れるのではないかと皆で考え、周囲を巻き込み、大人を説得していきます。私たちにはこういう伝統があるかもしれないけど、社会が変化し、これから学校がこういう方向に変わっていくなら、こう変えなければいけないんじゃないですかなどと、かなり論理的に自分達の意見をまとめて持つてくるということができるようになっています。

ただがむしゃらにやりたいんだからやらせてほしいと突っ走るのではなく、社会に出て自分達が社会を動かしていくときに、例えば法律のような大きな壁があるかもしれないけど、それに向かっていくときには皆で一緒にこう動けば相手を説得すればできるのではないか、社会が動くのではないかということが見えてくる一つのきっかけになるのではないかなと思えます。そういう意味では、大きな塀で囲み、重い蓋をかぶせるということが、逆に子供達の力を上手く伸ばしていくということにつながるのではないかと、女子校の一つの共通する形について、説明させていただきました。

實吉：ありがとうございました。時間もだいぶたってきましたが、当初もう少し時間が欲しいと言いましたが、なるべく時間内には終わらせようと思っています。私の学校でも確かに子供達は女子校に（共学？）しないの？女子校（共学？）になれば今、先生は生徒が少ないって苦しんでるけど生徒が増えるんじゃないの？とこういう言い方をする子もいます。その子に対して私は、あなたと同じ男の子がそばにいていいの？というわけです。その子供にとっては非常にショックな言い方だと思います。近くに芝って学校がありますが、芝の男の子と一緒にいろんな事ができる〇〇〇〇〇〇。それでは会場の方から少し先生をご氏名いただいて結構ですのでなにあればお願いします。

参加者：もし自分の学校の生徒さんが学校を紹介するとしたら、どのように紹介すると思うか。自分は男子校の教師をしていたことがあり、生徒達が学校のPRをするのを見たことがあり、女子校だとどうだったのかなと思った。女子校の先生方にお聞きしたい。

吉野：一人一人皆違う学校の認識を持っていると思うので、あの子だったら何とかなんかというところでしか思いつかないのですが、とにかく明るいということの一つ大きなポイントにして話をするだろうなと思います。どんな学校かと聞くと、明るい、仲が良い、団結力がある、お互い包み隠さずなんでも話すことができる、一緒に笑い一緒に泣ける、共感性があり自分らしくいられるなどというところを学校のアピールポイントにしたいと思います。

錦：私の学校でも高校2年生になると全員学校説明会のお手伝いをする。10人くらい、入学試験の会場設営になってしまう生徒がいるのですが、とってものがっかりしています。皆自分の学校の魅力を伝えたいと思っている。学校が大好きというか。一日手伝いをするとう鳩サブレを渡しているのですが、その鳩サブレを宝物のように有り難がっている生徒を見ると本当に可愛いなと思っています。

實吉：吉野先生も女子校という意味で感じている部分があると思いますが。

吉野：はい。周りを囲んでいる塀と、もう一つは蓋みたいなのがある気がします。一般的にいいますと男子校の方がいろいろな意味で自由さがあるのでしょうか。さっき錦先生のお話にありましたように、やはり女子校ですと色々な意味でちょっとこれはまずいのではないかなんかといって制約してしまうことがどうしてもあります。学園祭などでも、お客様をもてなすのだったらもう少しこうした方がいいのではないのか、やはり男子校の生徒がぞろっと入ってきて、あちこちでべたべたされてもまずいとか、例えばそういうようなことが女子校はどうしてもあります。

また、こういう規則でやりましょうという、自分たちで決めて代々受け継いできた

決まり事があります。これは、基本的に越えてはいけない塀のようなものかもしれません。と共に、学校としては、そこにこういう枠の中でやってもらいますよという話蓋をします。それは不自由だと生徒が受けとめ、その蓋を外してもっとやりたいという場合には、これまでの経緯を調べ、他校の生徒から情報を集め、こういう論理でこういう風に攻めていけば大人もうんと言わんじやないか、蓋が外れるのではないかと皆で考え、周囲を巻き込み、大人を説得していきます。私たちにはこういう伝統があるかもしれないけど、社会が変化し、これから学校がこういう方向に変わっていくなら、こう変えなければいけないんじゃないですかなどと、かなり論理的に自分達の意見をまとめて持ってくるということができるようになっています。

ただがむしゃらにやりたいんだからやらせてほしいと突っ走るのではなく、社会に出て自分達が社会を動かしていくときに、例えば法律のような大きな壁があるかもしれないけど、それに向かっていくときには皆で一緒にこう動けば相手を説得すればできるのではないかと、社会が動くのではないかとということが見えてくる一つのきっかけになるのではないかなと思います。そういう意味では、大きな塀で囲み、重い蓋をかぶせるということが、逆に子供達の力を上手く伸ばしていくということにつながるのではないかと、女子校の一つの共通する形について、説明させていただきました。

實吉：ありがとうございます。時間もだいぶたってきましたが、なるべく時間内には終わらせようと思っています。私の学校でも確かに子供達は共学にしないの？共学になれば今、先生は生徒が少ないって苦しんでるけど、生徒が増えるんじゃないの？とこういう言い方をする子もいます。その子に対して私は、あなたと同じ男の子がそばにいていいの？というわけです。その子供にとっては非常にショックな言い方だと思います。それでは会場の方から少し先生をご指名いただいて結構ですので、なにかあればお願いします。

参加者：もし自分の学校の生徒さんが学校を紹介するとしたら、どのように紹介すると思うか。自分は男子校の教師をしていたことがあり、生徒達が学校のPRをするのを見たことがあり、女子校だとどうだったのかなと思った。女子校の先生方にお聞きしたい。

吉野：一人一人皆違う学校の認識を持っていると思うので、あの子だったら何と云うかなというところでしか思いつかないのですが、とにかく明るいということの一つ大きなポイントにして話をするだろうなと思います。どんな学校かと聞くと、明るい、仲が良い、団結力がある、お互い包み隠さずなんでも話すことができる、一緒に笑い一緒に泣ける、共感性があり自分らしくいられるなどというところを学校のアピールポイントにしたいと思います。

錦：私の学校でも高校2年生になると全員学校説明会のお手伝いをする。10人くら

い、入学試験の会場設営になってしまう生徒がいるのですが、とっつてもがっかりしています。皆自分の学校の魅力を伝えたいと思っている。学校が大好きというか。一日手伝いをするとう鳩サブレを渡しているのですが、その鳩サブレを宝物のように有り難がっている生徒を見ると本当に可愛いなと思っています。

工藤：抽象的な形で言えば男子校も女子校も、子供達はその学校にプライドを持っていますから、その部分では同じじゃないかなと思う。ただ男子校の団結というのは、よりマスの大きな団結力があるんだということを、行事だとか活動を通して自分達がやっていることを訴えていくんじゃないかと思う。パワーが団結ということをも男の子の場合はより全面的に出すのではないかと、感じている。

参加者：女子校の先生、男子校の先生それぞれにおたずねしたい。小学校6年生の卒業する時点での母親と娘、あるいは息子の関係と、高校3年生を卒業する時点での関係は当然変わってくると思うが、それを好ましい方向に変えていくために、女子校、男子校で意識して取り組んでいる事はあるか。もしあればその事例を紹介して欲しい。

阿部：だいぶ私の主観で申し上げるのですが、普通、親というのは我慢して子供を見つめることが大切だと思うんです。親という漢字は、左側の「立」に「木」という字は「辛」という字が元々で、これは生木を割くという意味です。つまり、生木を割くような辛さに耐えて子供を見守る存在が親なんだということ。ところが、今は何とかペアレンツという言葉が多いですが、最近聞いたのでは、カーリングペアレンツ。つまり、カーリングの行き先を指示するように子供の進路を指示決定する親御さんが増えているということでしょう。ですから入学式の時にはその「親離れ、子離れ」のお願いをします。学校は生徒を自立させたいから、そこのところをご理解ください、と。

吉野：今お話しがあったように、一つの価値観の中で子供をこの枠の中で育てたいという思いが親にはあると思います。しかし、社会の多様な価値観の中に放り込んでその中で自分の価値観というものをしっかりと自分で持てるようになることが大人になることだと思います。そのために、私たちも色々な取り組みをしてきました。例えば保護者会で家族社会学や家族心理学の先生の話をお願いしていただくなどです。ところが、これまでずっと自分の価値観の中で子育てをしてきていますので、今、親がなかなか変わらないという状況があります。

子供を自立させるためにはどうすればいいのかということを考えて、数年前から始めた取り組みがアサーション・トレーニングです。心理学のトレーニングですけれども、初年度は中学校3年間で、2年目からは中学校1年生と2年生2年間で10数回程度のプログラムを組みました。トレーナーにクラスに入ってもらって、相手の状況を理解した上で、自分の言いたいことをきちんと相手に伝えられるかというトレーニ



ングです。

例えば明日一緒に遊びに行こうと言われた時に、親から門限何時ですよときつく言われている子はなかなか大変です。隣の子は8時に帰ればいいと言っている、でも私は親から6時だと言われている、6時に帰らないと悪い子と叱られる、そういう子供は8時までいい？ となかなか言えません。親が怖い場合もあれば、悪い子になって心配をかけたくない、悪い子と思われたくないという場合もあります。一方、隣の子に対しても相手の方が大人に見え、格好悪くて門限6時だと言えません。ずるずると8時まで遊んでしまって、帰ると親から散々叱られて気まずい思いをすることになります。また、親からどこ行ってたのと責められれば、いずれ秘密をつくるようになり、嘘をつくようになることもあるでしょう。

それが実は自立につながっていくのですが、その段階できちんと隣の子に、“私は門限6時だから、それまでには帰ろうね”と言える、あるいは親に対して“今度一緒に遊びに行く子は門限8時だから、明日だけはちょっと遅くなってもいいかな”と言える。そういうふうにして自己肯定感を背景に、親から自立していくためのトレーニングにもなっていくのです。導入してまだ3年目ですので結果が出ているわけではありませんが、少しずつ自分の意見を皆の前ではっきり言うことができる、パブリックスピーキングができる生徒というのがさらに増えてきているのではないかと感じています。

参加者：小学6年生の母です。私はずっと共学でしたが兄や弟が男子校だったこともあって別学の良さや中高一貫校の面倒見の良さという形で中学受験を考えているのですが、今まで先生方がおっしゃったように別学の教育の良さ、女子校ならではの一生の友、男子校でも同じ事が言えると思うのですが、は理解しているつもりなんです。男女別学をでたあと共学の社会に出たときに、男女の距離感を上手くとれなかったり、何か問題はないのか。

阿部：私のところでは10年ほど続いています。PTAの主催で、6月に卒業生と卒業生の保護者のみなさんに舞台上がってもらってパネルディスカッションを開いています。観客は在校生の保護者です。この会は人気があって、中学、高校で午前と午後の2回に分けてやっています。テーマはいろいろありますが、たとえば、親にこんな事をされて、言われて嫌だった、あるいはこんな事をされて嬉しかった、良かったということ、卒業生が話してくれたりするんです。

参加者：小学6年生の母です。私はずっと共学でしたが兄や弟が男子校だったこともあって別学の良さや中高一貫校の面倒見の良さという形で中学受験を考えているのですが、今まで先生方がおっしゃったように別学の教育の良さ、女子校ならではの一生の友、男子校でも同じ事が言えると思うのですが、は理解しているつもりなんです。男女別学をでたあと共学の社会に出たときに、男女の距離感を上手くとれなかったり、

何か問題はないのか。

錦：まず、最初に話がずれると思いますが、お子様の学校選びにあんまり男子校・女子校・男女共学というところから入らないで、お嬢さんが学校見学に行ってみて一番雰囲気合う学校を選んだらいかがでしょうか。在校生に聞いてみても、なぜ、鎌女を選んだのという、ほとんどの子がわからないという。でも、ここの学校に来てみたら、自分が自然一人でできることはないわけですよ、ですからある場面ではいられるとか、この学校に自分がいることが想像できるとか、そういう感覚ってとても大事だと思います。そういう意味で、最初から志望校をあまり限定して決めない方がいいかなと思うのです。少し話がそれましたが、本校の卒業生がよく、学校に遊びに来ますが、進学後、男女のコミュニケーションに困っている様子はありません。私がみていますと、男女別学の良さというのは、先程申し上げましたように女性でもリーダーシップがつかますが、もう一つ偉いと思うのはフォロワーシップも抜群なのです。やはりこれからの社会を生きていくためには、自分がリーダーシップをとらなきゃいけないときはリーダーシップをとるし、リーダーがいればフォロワーシップができるという、どのような集団でも適応できる人間性を備えて、進学してもらえれば良いと思います。そういう意味で、男女関係なくお友達が多いとか、ゼミとかサークルで中心的な役割を果たしているという卒業生が大変多いと感じております。大学に進学したら、女子校だからとても戸惑ったという話は全然聞いた事はないです。

吉野：そもそも、男女の交流を禁じてはいませんから、小学校の時の男の子の友達とのつきあいが続いている子もいます。また、勉強は学校の中だけではないということで、本校では他校との交流がいろいろ場面ではありますが、先ほど申し上げた海陽学園、早稲田高等学院等の他にも、例を挙げれば芝とか城北とか慶應義塾とか、男子校が多いですね。そういう中で自然に違いを理解しながら、互いに尊敬しながら、うまくつきあっているように見えます。

ただ、女子校の場合は、例えば重い物を運ぶのも自分たちだという環境の中で育っていますから、共学校の女の子が“こんなの持てない”とかいうのが分からず、率先して力仕事もしてしまいます。むしろ、動かない、ぐずぐずしている男の子のおしりを蹴飛ばしながら、とにかくみんなと一緒に動こうよというリーダーシップを取っている女子校出身者が多いのではないのでしょうか。世間でよく言う一般的な「女子力」に欠けるといえばそうなのかもしれません。でも、男性だけへの気遣いではなく、むしろ男性にも女性にも同じように気遣いできるのが女子校出身者の特徴ではないのでしょうか。

實吉：おおたさん、今日は来ていただいてありがとうございます。いろんな取材活動をされたり、ご自分で執筆されたりしていて、今日のお話を聞きながら一言いただけたら。

おた：この数年で男女別学教育に関してはすごく広まってきたなと感じていて、ついこの間3月に「週刊新潮」でも男女別学についての記事を書かせていただいて、読んでいただいた先生方もいらっしゃるかと思いますが、あれもすごく反響があったということで、男女別学についての理解がすすみ、ちょっと前まではあの学校良い学校なんだけど男子校なんだよなとか女子校なんだよな、というような話もあったのですが、でも女子校は女子校で良いところがあるんだよね、共学と違う視点があるよねみたいな事が割と通じるようになってきたと思います。本当にこういったセミナー、もしくは先生方のお力かなと思う。

一方でこれからさらに広めていく上で私が記事を書くとき気をつけている事を2点紹介させてください。よく男女の話になりますと、とはいえ個人差だよなというのが前提になると思うのですが、今日何度も出てきましたが体育祭の例をみても、集団として見たときに男の子の集団と女の子の集団は別の動きをするよなと、これは間違いない。なので個人差があるのは当然なんですけど集団において教育をする。これが2点目なんですけども、これはジェンダー論と教育論がごっちゃになってしまうとわけがわからなくなってしまう。それぞれ大事ですがそれは次元が違うということを明確に区別をして話をする必要がある。

学校という集団において教育論として男女別学のメリットがどういうところにあるのか、気をつけないといけないところがどんなところにあるのかという風な話に終始すべきで、ジェンダー論はジェンダー論で別の次元で話をしなければいけないと思います。で、そのジェンダー論と言ったときに、一つだけ今後の課題かなと思っていることがあります。よく女子校さんですと、女性は出産したり特有の人生のターニングポイントがあるのでそれを意識した人生教育みたいなものが行われていますが、私は実は教育だけではなくイクメンみたいなことで全国で講演会をやったりするんですが、そこでふと思うのが、じゃあ奥さんが妊娠しました、子供を産みました、子供を産むということは代わってあげることはできないですが、じゃあそこで仕事を辞めるか辞めないかを女性だけが選択しなくてはいけないのはおかしいよね、だって旦那さんが主夫になってもいいんじゃない、という風な話を時々するんですが、男性がこれから男女共同参画社会の中でどういう風な役割を果たしていくべきなのか、従来の男性らしさみたいなものに囚われていないかというような視点で、男子校におけるイクメン講座みたいなものがあったらいいのかなと思ひまして、工藤先生のところは色々ユニークな講座をやっていますので、もしよければお力になればと思っています。

## 閉会のご挨拶

清水哲雄先生（鷗友学園女子中学高等学校理事）

皆様お疲れ様でございました。今回の男女別学シンポジウムいかがでしたでしょうか。ちょっとレベルアップしたかなと私は思っております。子供達を育てるというのは私たち大人の大変大きな役割ですが、中でも思春期の子供達をどう育てるかというのは大変大きなテーマでございます。今回のシンポジウムをお聞きになって男女別学の学校にいかせてみようかな、というお気持ちを少しでもお持ちになっていただけたら私としては大変ありがたいと思っております。

私たちの仕事には子供達の知性と感性をバランス良くともに育むという大変大きなテーマがございます。ただ総論は皆様賛成でも、具体的にどのようにするかということになると、まだなかなか整理がついていないのではないかと思います。男子と女子では発達過程の違い、時間差、思考パターンの違い等々多くの違いがあると思いますが、今日はその具体的な違いをかなり詳しく話していただいたのではないかなと思います。すみません遅参してしまったものですから最初の方は聞いてないのですがたぶんそうだろうと思います。

どうか皆様、このシンポジウムを振り返っていただき、気になった事、共感した点などを通して、男女別学について考えを深めていただければ幸いです。そしてもしよろしければこういう会があることを多くの方にお話していただければと思います。

5時を回ってしまいました。長いことお聞きいただきましてありがとうございます。本日はこれにて終了させていただきます。ありがとうございました。